

刺
口八

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

第 六 輯

第 六 輯

かくれてある宇宙の眞理を發見
するには、感覺に反すると云ふ
ことに迷はるゝはならない。
ゲ—テ

目次

○長瀬に送る覽え書	永崎	貢
○新しい感情	稲葉	信之貢
○土工宿に付かたみも残りぬ	永崎	貢
○若き労働者	永崎	貢
○非詩 三十章	コズミ	哲
○腕と腕を組み！起ちよれ！！	水野	純平
○闘鶏群に於ける喇叭のリズム	松本	純一
○彼も亦同志の一人だ	長瀬	陸兵
表紙	長瀬	貢

長瀬に送る覽え書

—— 第五輯の小論のために。

永崎 貢

A

藝術の原始的な形式が人間の労働から発生した——といふことは今日のイロハである。そしてその「労働」の過ぎ去った後にその「労働」に於てなした行為の一部を人間は繰返すものである。その時それは形式を定めざるにすぎない。そしてそれは遊戯と称せられる。同時にそれは原始人の藝術形式である。一方人間は自己の感情を音や色や言語によつて表現された形象により自分の中に呼び起し他人にも感染せしめんとする。従つて藝術は人と人とを結合せしめる手段である。人と人とを——それ故にそれは社会的手段である。この二つの事柄からわれわれは児童画をも含めての絵画（一般に藝術）の本質は暗示され又その（絵画、藝術の）階級性も示唆される。無心なる児童画すら環境を異にする時同じものを描きはしない。描いたとしてもその内容も同じにすることはない。

B
を論ずるは常にすべて意識の中に織り込んで製作するとは考へられない。
しかし一旦藝術品となる以上客観的社会的に評價されることを作者は拒否する
権利がない。そして又「一個人の何たるかは彼が自己を如何に考へるかに
よつては判断される」ことも事實真理である。藝術はどうしても階級性をもつ
てあることが知られる。

長瀬の「ヘンな絵の解説」はそれ自身平田や高瀬の批評を肯定してある
ことも知られる。

C
絵画に於ける主観的観念的傾向と客観的現實的傾向とは同じく現實に對
する画家の態度から生ずる。前者は没落する階級の藝術態度であり後者は
新興階級のそれである。然し後者の態度にしても時代と階級とは制約される。
一般的なしアリズムなんて云ふものは現實には存在しない。それはたゞイテ
アリズムの友であるにすぎぬ。現實をありのままに「先入的観念」を以て
歪めずに正確に描き出すことが問題だ。正確といふ点で藝術は飽くま
でも階級性をもつてあることが知られる。
そこでどうなるか。

D

結論として。

長瀬は多少の認識を欠いたとしても實に正當に大膽に自分自身を批判し盡
してゐる。彼は進むべき方向を綺麗に掃除したやうである。
これから先には一歩一歩どつしりと進むことのみが残されてゐるだけだ。
問題は画家の観念にあるのであつて、むしろその題材にあるのではない。
長瀬よりオ！

(長瀬の論文に負ふところ多し。 — 一九三〇。一、二六夜 永崎)

新しい感情

稲葉信之

今、社会に一つの新しい感情が芽生えつつあるのではないでせうか。
それは凡そ、祖国のために奮闘、三つといふやうな心もちで、全く別なもの
やうです。
祖国日本といふ風に、一色に塗りつぶす前に、そこで付、たとへば、わい、わい、
いふやうな言葉が前面に現れて来るのです。

女にも、凡そ二種あると思ふのです。

「働く女」と「遊んで暮らす女」と……

プロレタリア演劇「全線」を見てゐた一人の女は、とうく右腕を突き出
して「異議なし……」と叫んで了つたのです。

泪つぽとホロ／＼こぼしながら、力をこめて突出された彼女の右腕はしかし、その
瞬間硬直したやうに動かなくなつたのです。アゴヒエの男の腕が彼女の右腕を
いつ振へてゐたのです。

おお！・涙をみだ。
ボロ／＼、こぼれ落ちる涙つぼを、彼女は仕方なく左頬で拭ったのです。

彼女は、バスに働く女だったのです。

舞台では、くたく／＼に拷問攻めにあった夫が思はず、味方を裏切ろうとしてゐたのです。その時です。妻が、「死んでもいいからミミミ」と叫んで、そして夫にとびついたミミミです。

こぼれ、新しい涙ではないでせうか。

「働く女／＼、同じく働く者同志のために、思はず落した涙で、ないでせうか。」

新しい感情が芽生えつつある。一口に表現すると、それはプロレタリアートの感情とも言はれぬならぬ、ものではないでせうか。

(一九三〇、二、一)

土工宿にはかたみも残らぬ

永 崎 貢

(1)

青い篠竹のやうに、郎ぶく水した熊手ひるげ

おれとあいつはからだを海水にのせる

けふで二十六日目

お天道さまが浮きよるとおれとあいつは防波堤にぶらさがるのだ

病みあがりの若いのが流さぬ

おれと一つ年の男が後は

喘息もちの老け水が浪に喰はれ

おれは毎日仲間がおなくなるのをたまたまなく耐えた

二人減り………三人減って………

土工宿には靴下一つかたみも残ってゐなかつた

(2)

おれだけは運がよいのか悪いのか
すけ 油びん一本さげて
風と蚊と頭の面に追ひ立てられて海へゆく
浪をかぶり

夕、キに突立つた頭と監督に猫目を使い
水びたいで憎しみと怒りは洗ひ去られる
日沈むまでがおれとあいつの労働だ
あいつのふざぎの虫は冷え切つて死ぬ
んだがおれの反抗の血はあの海水をたぎらせる
底流は赤いほど おれははつきり
寄せる白浪をくぐつて鱈の群の急ぐのを見た

(3)

壁にたゝきつけられるたんび

おれは死んだ若いの、力にひかれ

走いぼれの血に押し上げられる

あいつらの怒！ あいつらの復讐！

となりの仲間もおどろくではないか！

(4)

ふざぎの虫は土工指には棲みつかぬ

おれとあいつと

村を追はれ田一枚たゝき返したおれが

死んだ仲間のくさ水木のやうに食ふも食はずで瘦せ細りかたみも

なく流れたのを忘れていゝのか

死ぬば死ぬだけ安くこき使ふ商品に就く機嫌にする奴ら

皮一枚下までしやぶる奴らに

おれとあいつとは 浪を怒らぬとして又

土工指に死なしてもらふのを待たぬ

鱈の如く群をなし血ぬられた力でかゝるまで

黒がねの腕ねちり合せて起つまでだ

若き労働者

エドウィン・ホイルンレ

今やあらゆる木々は日光を浴び
あらゆる草は甘い夜に酔ふてゐる
何で工場の際々たる煙は僕を追ひ出さうか
僕は若い太陽の火花だ

僕は自由に狂暴に
花に突あたる若い風だ
甲蟲のやうな然も神のやうに偉大な
大地にはぐくまれた穀粒だ

僕がこの若々しい力を太陽の光にさし伸ばしたとて何の悪いことがあらう
創造の腕もて思考の頭上に花環をのせるとも何の悪いことがあらう

僕はもはや狂暴な機械の
奴隷とはなつてはゐないのだ！
もし僕に創造の力があるものなら
僕は蒸気と銅鐵の上に王座を据えるのだ

(平田 哲記)

非詩三十章

Komercisto

6. 詩学を持つもの
生活を持つもの

生活を持つものに詩学はない
例へば奔る水だ
詩人

柳へき水ない水の力で感情は噴出する

7. 又
導いた水には水自身の意志がない

8. 山の上に立つてゐる
粗末な標的

理由は複雑にくつかる
然し止也！

何人にも通ずる意志は簡單明白

彼等は踏みしめて 踏みしめて登る
只一つの意志。刀！

9. 漫開だといふことは
散れるといふことだ

10. 「移住民」の

その笑ひ声を聞くがい、

その笑ひ声

強烈なる意志

噴激なる忍従

現實する反抗

生活する真理

それに加ふるに闘ひ抜くべき観声！

その笑ひ声は

いかなる音響音も假装し得ない

その笑ひ声は

背後からひきずってくる意力がある

11.

算盤を持った詩

それもいい

然し進まうとする詩ではない
おづおづと周囲を見廻す詩である

新しい詩は

弾丸！

飛び出さなければならぬ
寸分のさりうたかりを立マ、

弾丸

弾丸！

12

生え抜きの刀

透明な意志

土壌を黒くくたさ

生活を吸ひ揚げて
戦ひ抜く緑色

壓ふべき何ものもない
一本一本の底からの力

13

誰も頼みはしない
誰も導きはしない
そしてまた誰からの意志でもない

地から天に通ふ各々の生活そのものだ
各々の力から生ずれた各々の意志だ

14

勝つたのではない
そして君が負けたのではない

春

己れの意志を挫けた冬ではない

15

春といふのは

一本の枯木が本来の意志を實現したのに過ぎない

一本の枯木は誰でもない
各々各々が一本の枯木であるのだ

(未完)

腕と腕を組め！起ち上れ！！

水野 莊平

おいみんな！！

腕を組んでとつくり考へて呉れ！

いいか。若いの

モーターに手なんかかけらんぢやねえ。

職場職場のベルトは皆はずしてあるんだ！

おい。みんな！！

この貼紙をよく見て呉れ！

これが一俵あたりさえの事なのか？

これが働く者への當然の報ひなのか？

なあ。兄弟！！

あいつら金持は働かぬえでも

俺達から搾り取った金で

ゼイタク三昧な生活も出来るが、

朝から夜迄働いてさえも

おいら労働者には、麦飯も

あつく食えねんだ！

だがみんな！！

も一度、この貼紙をじっくり見つけて呉れ！

あいつら金持は、この上何にを

おいら労働者から搾り取らうて言ふんだ！

なにか「不景気に付き」なんだ！

なにか「産業合理化のため」なんだ！

なにか「不稔の行爲ありき」なんだ！

おい。みんな！！

こまかこまるんぢやねえ。

何にから何にまで、あいつら金持の

でいい、金儲けのかラクリなんだ！

なあ。そうぢやねえか。

賃金が此の上安くなりや、
おい、労働者は明日からでも
粟かこエの飯でも食はなけりや
生きてゆけぬえんだ！

それなのにみんな！！

賃金値下に反抗して立ち上つた

おいらの勇敢な兄弟達を

あいつら金持はすぐ首切りだ！

おまけに警察のブタ箱に

十日もこめやがつて

朝となく、晝となく、夜となく

時と定めぬゴーストに、

あれ程元気がつた

おいらの勇敢な兄弟達は、

飢えと寒さに

めつきり瘡を細りやがつて

かきく、にヒカラびた體を

この冬空の街に失業と一語に

おつぽり出されたのだ！

おい。みんな！！

これが「正しい政治」だつて言ふのか？、

これが「明るい世の中」だつて言ふのか？、

なあ兄弟！！

ちえっ……笑はせられ。

唯水があいつら金持にゴマカサれるものか！

賃銀の値下にも、

仲間首切りにも

絶体に反対だ、

おい。兄弟！！

俺の言ふことが、わかりぬえのか？、

それとも俺の言ふことが正しくおえのか？
おい。若いのか！
なんだ。涙なんか流すなやめえ。
言ひええ事があるんなら、
脇の底から、にえくり返へる脇の中から
口頃だまり切つてゐる
不平と不満をぶちあげろ！

おい。みんな！！
わかつてくれたのか！
そうだ！

腕と腕を組むんだ！
そして起ち上れ！！

おや、みんな！！
用意はいいか！
俺達の要求の通りだ

デモをやれ！
ストライキで戦へ！！

おい。若いのか！！
お前はピケだ。
俺達の宣言を
職場から職場へと傳達するんだ！
いいか余計な事は言ふなやめえ！

腕と腕を組め！
起ち上れ！！
デモをやれ！
ストライキで戦へ！！

これだけだ。
い、か！
わかつたか！！

彼も亦同志一人だ

長瀬陸兵

野木三郎

ビッコザブ

これは彼の名だ

前者は彼の本当の名で、私達もそう呼んでゐる

後者のこの醜い名は、彼が勤めてゐる煉鉄工場の息子達が付けた名だ

以前

彼のお父さんは炭山で支社夫としてゐた、お母さんは同じ坑内の炭山下

共嫁ぎだった

その頃まだ母さんの子供にすぎなかつたが、

にもかかはらず大人のように仕事がつくとあつた

一番下の弟は六号長屋の叔母に預けられてゐた

二人の小さな妹が遊びから歸れば、彼はお母さんの後目

をせねばならぬ

この小さな家の小さな家長

彼が十二の冬、彼のお父さんは頭を傷めて仕事を離れてしまった
お母さん一人立ちの生計、
或る夜、お父さんとお母さんが大きな声論ひ争ひをした
次の日彼は両親の間に呼び出された
今日からお前は所へ行かぬやうな
彼がやられた家はすべからず家と見ても似つかぬ程大きなものだった
親方はお前は此處で働くのだと彼を仕事場へ連れて行った、
彼が入った世界
眞つ赤に焼けた大きな銑鉄爐、野獸がうなり合う
熱帯地のやうな地響、鉄と鉄との間から躍り出る火の團塊、
親方はまるで大きな象だ
次の日から次の日
戦争
戦争
戦争
戦争
彼は毎日塵だらけで血にじむ牛馬のやうな仕事に追ひ廻は
された

あり余る刺激と、
金屈の音は絶えず彼を人間から引き離して行った
親方の罵声は彈丸の破裂だ！
蒼白蛇のやうな親方のあゝ息子達、
暑く苦しい仕事場、戦地から歸る彼を待つ栗め付いた
人間達の牢獄、牢獄に呻吟する囚人となんの変りがあるだらう
孤獨！
小さな虫けらが強いしかも同じ生物に蹂みつぶされるやうに、彼は
或る日大きなハンマアがのし掛かつて来たと思つた、彼の右足は
既に粉碎されてゐた
おつちよこちよこ
でれすけ！
あは 奴！
二水が送られた、負傷者へのけなむした
瞬間、眼界の全てが彼の前に廻つて始めた
飛散したドス黒い血潮のなかに彼は気絶してしまつた
数ヶ月たつて、傷が癒いて病院から出ると

彼は二つ名を持つやうになつた
ビッコサブ！

おおこの醜い新しい名

この怪物が電気のやうに彼をぶちめしてしう
彼は湧き出る憤怒を燃やして
節立った両腕と片方の足を凝つと視つめる。

編輯後記

△創造は藝術の重大なる要素に傳統を踏台
にするのはよいが、其上に座つて喜んでゐるは駄
目だ、其の高さを利用して藝術の殿堂を觀
おけなさい。
現世、富、依り格恰してせよ、踏台の上に座り
こんでゐる人達が少くないやうだ。

△喇叭は詩を主として俺達の魂の充實を計る
處女地だ。
開墾者よ、集れ

俺達は寛容な、真面目な、偶像に囚はれ
ずい、自由に、大膽に大衆と共に俺達
は進もう
握手を求めろ。

△同心としてゐる吾々がみるそれぐ、怪しい仕
事を待つてゐる爲め、毎朝三時より後水
のことふ事は寄稿して下さつた諸氏に
對してもうと吾々にしても遺憾にたへない
事だ

何より喇叭としては、永崎、平田、稻
葉、水野、諸氏の寄稿が、万才だ。

二一、松久、田生

△寄贈誌多謝
「一九三〇」「馬」

○喇叭第六號（非売品）

○昭和五年三月十日印刷發行

○編輯印刷人 今井冬望

○發行 心佐、正實

○福島、平、旧城跡三、九

喇叭社

